

管弦楽曲での弦楽器の実用的な弓の使い方について

川越 守

I はじめに

手書きの譜例は、全音楽譜出版社、音楽之友社、並びに、日本楽譜出版社のスコア（総譜）からの転載であるが、各社の許可を得たものである。

なお、バイオリンの教則本、あるいは演奏法ということで出版されたものを少しあげておく。Bowling、運弓、ボーイングということでは、どの本も克明に説明がなされている。

1. Leopold Mozart (レオポルト・モーツァルト)

天才モーツァルトの父親 (1987 年)

「Versuch einer Gründlichen Violin schule」

2. C. H. Hohmann (クリスチャン・ハインリッヒ・ホーマン)

唱歌法について、自主性に期待する指導法の提唱者

「Practical Violin school」

これは、唱歌教育の権威メーソンが、日本政府から招聘された折に我国に持ってきたもの (明治 13 年来日)

3. Carl Flesch (カルル・フレッシュ)

「バイオリン奏法」 (1923 年)

4. Hugo Seling (フーゴー・ゼーリング)

「Die neue Geigen Schule」

これらは、「独奏曲」「エチュード」、時には、「室内楽曲」といったもののボーイングの譜例が多数のせられている。


日本では、戦後、篠崎バイオリン教本とか、Suzuki Violin school といったものが普及していった。チェロ、コントラバスにも教本はある。奏者としてのオーケストラへの入団は、こういった教本を終えた人達が行ってきたのである。

私のこれからの記述は、

1. 音楽書として (指揮の体験をもとにしたもの)
2. 管弦楽曲の鑑賞者の為の一助として
3. オーケストラを現在体験している弦楽器奏者の為のボーイング付けの参考として、といった目的の為である。

とりあえず、二つの、弓の為の音楽用語について説明しておく。

a. staccato (スタッカート)

一般的な音楽用語である。音符の価値より少し短い表現をする。記譜は  のように、玉の上に点を付けて表記する。一種のアクセントと考えればよい。バイオリンでは、弓を弦の上に置いて動かし、短い音を作り出す為に、その動きをしっかりと止める。弓は下げたり、 \square 上げたり、 \vee と交互に動かす。次のように表記する。



b. spiccato (スピッカート)

弓を“とばす”ともいう。リズムはテンポが遅くても、速くても表現出来る。弓は弦からはなし、上から弦に打ちつける運弓である。鋭くて軽い感じの音を作り出す。



p — スタッカート表記でもよい。
f — 演奏面でスピッカートにする。

II 総説

a. 歌謡曲の伴奏オーケストラがあるとする。ジャズのフル・バンドがそれなのだが、その中に弦楽器が8～10名位、いることがある。バイオリンが主となるが、時には、チェロなども加わっている。弓の動きがよく合わさって演奏が行われている。この弓の動きを「上げ弓」とか「下げ弓」というのだが、(バイオリンは第1とか第2といったようにグループ分けされている) この第1バイオリンのトップ奏者が、バイオリンのパート譜を見て、うまくボーイングの記号を付けて行くのである。それを他の奏者達がうつして、弓を合わせて弾くことになる。こういったバンドの場合は、「マイクロフォン」をそれぞれのセクションに使うので(会場の為、録音の為など)弦楽器も音量を気にする必要がない。要するに、弓の上げ下げは、よく情感を表出出来るものであればよい。もちろん、前述のスピッカートなども使用することは多々あるのである。指揮者はテンポの指示を行い、演奏は、ほとんどドラムのリズムにのせて進行して行く。とにかく、弓を使う楽器がその楽団にあると、必ず弓の上下の運動は合わさなければならないのである。このことは、我国の三味線の場合でも同じで、大勢で演奏する時には、上げ撥(すくい)下げ撥をきめて行う。東西の考え方は一致していたのである。

「up Bow」、「上げる」は弓の先の方から手元へむけて動かす。「down Bow」は弓を持っている手元から先へむけて動かすことをいう。奏者は、弓を動かす時に、速度や圧力のかけ方を調節して音量をきめ、情感をしっかりと出せるように練習をつむのである。up は \vee 、down には \square のしるしを音符の上につける。

b. さて、管弦楽団の場合はどうか。プロの場合は、弦楽器のトップ奏者がパート譜、あるいはスコアを見て適当（いいかげんという意味ではない）な弓付けを行う。又、各パートのトップ奏者が集まって付けることもあるだろう。指揮者は、もし、それで自分の意志どおりの演奏が出来るのなら、又、楽曲の表情がちゃんと出るのなら、それでよいとするだろう。意に沿わなければ、トップに相談して自分の思っているボーイングを、それぞれのパートに押し付けることになるだろう。各パートのメンバーが、ちゃんとそれで弾くことが出来れば「めでたい」のである。プロの場合は、とにかく、いやでも指揮者の意見に協力して行かなければならないのである。

c. アマの場合もややそのようにやって行くことになるのだが、ことはそう簡単ではない。メンバー一人一人が皆違った経験者、そしてうまい、へたといいとりどりなのである。そこで、指揮者は、ちゃんとした弓の使い方が出来て、楽曲の内容をしっかりと読みとって実際に弾いて見せることが出来れば、これが一番よい指導法だろう。「百聞は一見にしかず」なのである。

弓付けには、それがよいという理由もなければならぬ。奏者から、こうしたいという主張もあるだろう。指揮者は、ちゃんとそれをひっくり返すだけの理由をもって自分の弓付けを相手に押しつけるのである。

管楽器奏者や、ピアノ弾きが指揮を、ということになると、奏者の付けたボーイングで練習、本番をやることになる。それは、それで仕方がないだろう。日本の国内には、アマのオーケストラがかなり存在している。どのようにしてボーイングを決めていっているのかは、私自身は知らない。私は、ボーイング付けは、指揮者の重要な役割としてやってきた。弦楽器の鳴らし方、鳴り方について、十分な知識を持っているからでもある。だが、管楽器群との音量とかに合わせてスラーの付け方を変更するなどは、そんなにやさしいことではない。作曲者の書いた楽譜通りに弾いてこと足れば一番良いのだが、そうは問屋がおろさないのである。

d. ベートーベンの楽曲などには、意外に長いスラーが音符の上につけられて印刷されているものが結構ある。作曲者の意図は分からないでもない。プロでもこのままで弾けるかという、それは無理だろう。ベートーベンの時代に、どのようにして演奏が行われていたのか知るよしもないのだが、弾き手は結構手を加えて弾いていたのではないか。スコアはパート譜よりあとに印刷されていたというのだが、ベートーベンが校正していたのかどうか分からない。死んでからのものは、どうしようもないだろう。次の例は、長いスラーで書かれた楽譜だが、このままではちゃんとした音の「ひびき」は出ないだろう。長いといえば、ドゥボルザークや、マーラーなども弦楽器に長いスラーを書いている。

譜例 1. Beethoven 交響曲第7番 第3楽章から

Vn. I $\overset{2}{\curvearrowright}$ 印刷されたスコアから

Assai meno presto

これは一弓では弾けない。次の様な Bowing で演奏するとひびきの調子がよくなる。

Assai meno presto

「音楽之友社版から」

譜例 2. Beethoven 交響曲第9番 第3楽章から

127

cresc. poco a poco

Assai meno presto

f

印刷されたスコアからのものに直接 Bowing の記号を付けた。原譜のままの形をスラー通りに運弓するとひびきは足りないし表現も十分には行えない。cresc. もすることになると音量はまったく出ないだろう。

「全音楽譜出版社版から」

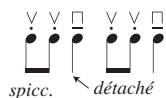
e. さて、弓の「上げ」「下げ」といったことでの弓の使いわけは、楽曲の表現にとってまことに重要なことで、同じ楽曲でも、ボーイングが違えば曲の質も変わってくるのである。弦楽器群の運弓法によって曲の様相もちがってくることを聴き手も分かるべきだろう。録音されたものも、よく聴くと、どんなボーイングで弾いているのかが分かる。もっとも、これは、耳がよく聴こえることが条件だし、曲についても楽譜を見るときは中味が分かっていなければならないだろう。ボーイングでその楽団の特色が一つ出来上がってくることは、たしかなのである。

Ⅲ 弦楽器のリズムの表出について

a. スコアに書かれた通りに、印刷通りということでもあるが、演奏することは可能である。しかし、モーツァルト、ベートーベンの作品についても今日はいろいろと弓付けを変えて、工夫しての演奏が多く行われるようになってきた。スピッカートは多用されるようになった。軽快なリズムを演奏者は表出したいのである。次に示したリズムは、普通は *staccato* で弾く。テンポは自由である。



これを軽く表現する為に *spiccato* と弦の上しっかりと置いた弓を混ぜて演奏する。



これは、独奏に限らず、オーケストラもそのようなボーイングがよい。このボーイングは、*f*でも *p*でも利用出来るのである。

b. 弦楽器群の鳴りは、管楽器の音量にも関係がある。ブラス（金管群）の大音量に対抗出来るだけのひびきが弦楽器群に要求されることが、しばしばある。大きな音の出るしっかりとしたボーイングが必要だろう。又、弦が *spiccato* で演奏するなら、管の方もそうとう短い「舌突き」が必要なのである。aの譜例のリズムを早口で「テッテッテ」といってみるとスピッカートでのリズムの表現が分かるだろう。楽曲によっては、管はスラーを付けてレガートに、弦はスピッカートでというものもある。作曲者が特殊な効果をねらったのだろう。

c. 音色については、いくら文字を書いても読み手には伝わらない。私は、オーケストラの音色については、ウィーン・フィルやベルリンの音に近づくことが出来ればよいと思ってやってきた。要するに、管弦楽というものは西洋の音だからである。批評の場合にも、これらの楽団よりよいとか、同等とか、それ以下というように書いてくれば、どんな音その会場に流れたのかがよく分かるのではないか。我々は、ボーイングとともに音色も作り出して行かなければならないのである。

d. オーケストラの弦楽器というのは、大きなオーケストラの場合、例えば、第1バイオリン16人、第2バイオリン14人というように「集団である」。メンバーは弓の同じ部分で弾かなければならないし、それは弾き易さも重要なのである。プロだからといって弓のどこでも弾けるということではない。弓の弾ける部分とか、使える部分というのは、国際的にほとんどきまっているのである。

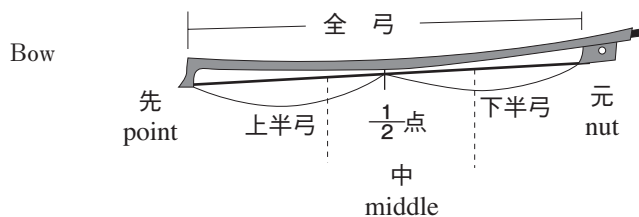
e. プロであれ、アマであれ楽曲の練習に当たり、あらかじめ運弓の記号 \square ∨がパート譜に書いてあれば、練習ははかどる。もし、ついていなくても、それぞれの奏者が音符の読みとりをやって演奏して行くことは出来るのであり、その際、弓の動きはばらばらであるが、オーケストラとしてはそれでもなり立つのである。一般的には、初めてやる曲の場合には、最初からちゃんとしたボーイングなどはないのである。指揮者が前もってスコアをしっかりと読みとり、ボーイングについても考えをもって練習にのぞんでいけば、弓付けに時間もとられず、練習はしっかりと進んで行くのである。

f. 指揮者についていえば、実際にいろいろな弦楽器が弾けた方がよい。このことは、指揮者を続けて行くことの出来る一つの条件だと私は思っている。弦楽器群をしっかりと把握出来ることが管弦楽曲演奏のポイントである。ベートーベンの交響曲のスコアを手にして、どのようにフレーズ、フレーズのボーイングを決めて行くかは、今日も指揮者の課題であろう。概ね、18・19世紀の作品をとり扱うさいには、弦楽器群のボーイングは常に工夫されたものが必要なのである。

g. 弓付けには弾き易さも重要と書いたが、楽曲のモチーフ(動機)なり、フレーズ(句)なりがスラーやリズムの表現を変更することで、それらが「輝き」を増す為にもそうするのであって、そのボーイングは何回もためしてみ決定する。この部分は、パートの奏者が全員で表現出来るようにと考えてやるのだが、時には弾きにくいこともあるだろう。それはそれでやって行くより仕方がないのである。

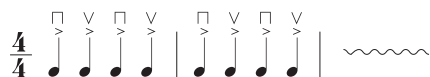
h. 管弦楽団の生の演奏を目をつぶって聴くのはもったいない。ボーイングをしっかりと見てよい音色を聴き、よいリズムの表現を聴くこと、そして、管打楽器としっかり合った演奏を体験するのがよい。ウィーンやベルリンに匹敵するだけのものが日本のプロであれアマであれ、オーケストラとしての「ひびき」がその場にあることがのぞましいのである。

IV 弓の使い方、使われ方について



奏者は「毛」の長さを $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{3}$ 、 $\frac{1}{4}$ 、 $\frac{1}{8}$ というように「目測」で分割して分かっている。次の用語は毛の当て方と、弓の動かし方を意味する。

a. détaché (デターシェ)



弓の $\frac{1}{2}$ 点の少し手元側から上方を使用する。弓を持っている手に力を入れて少しおさえ気味にして上げ下げの動作を行う。はっきりとしたリズムを弾き出す。

「むずかしいボーイング」



手元から先へ、4分音符は先から手元へ戻す。↓については、かなり圧力をぬかなければならない。これは、音量を一定にするのがなかなかむずかしいのである。



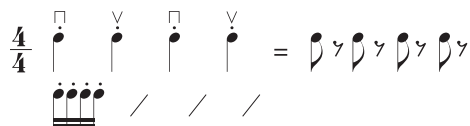
上のリズムをちぢめた形、上半弓で弾く。

b. marteré staccato (マルトウレ・スタッカート)



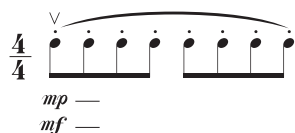
弓を持ってる手に力を入れて毛を弦にしっかりと当て、弓を動かしてはすぐに止める。初心者は、弓の動きをとめることがむずかしい。

c. spiccato (スピッカート)



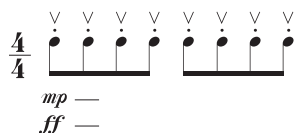
弦を弓で上から打つ。速度は自由に、速くても遅くても表現することが出来る。

d. flying staccato (フライイング・スタッカート) ※



弓先の方から手元へ弓を「バウンド」させて弾く。

e. standing staccato (スタンディング・スタッカート) ※

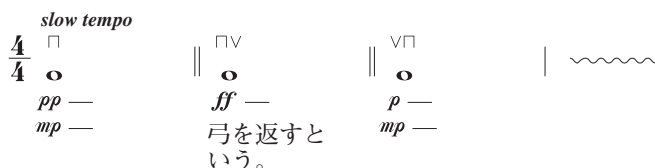


弓の毛の一点を何回も使う。音の強弱は強くても弱くても出来る。

※ 弓を弦からはなすので、スピッカートといってもよいだろう。

f. 一般的には弓の元の方で「歌う」ようなフレーズは演奏しない。毛の長さを $\frac{1}{4}$ に分けた時、手元の $\frac{1}{4}$ は残して上方の $\frac{3}{4}$ を使ってメロディーを弾く。ボーイングというものは、楽曲の内容を見て、それに合うようにつけて行く。楽器の鳴りは常に良くなければならない。スピッカートはそのフレーズに軽快さが要求される場合に使用される。音量は、弓の使われる場所によって、いろいろと変えることが出来る。*pp* とか、*p* といった音量では、先の部分を使用するのがよい。スピッカートは、一般的に毛の $\frac{1}{2}$ 点を中心に行われるのである。

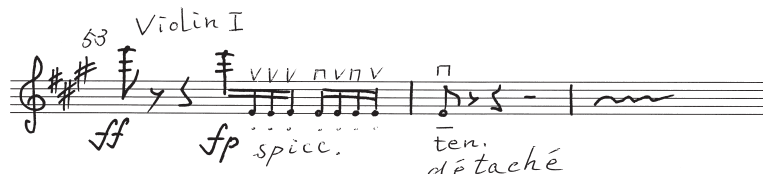
g. 全音符はいろいろと問題がある。普通は、一ヶの全音符に対しては、一弓の動きで処理するが、大きな音を要求された場合、又、小さくても音質がやせてしまう場合には、次のボーイングを行う。



管打楽器といっしょに *ff* などといった時には、それぞれの弦楽器の奏者は全音符に対して弓の返しの時を違って、ばらばらに弾くなどといったこともやるのである。

V 管弦楽曲でのボーイングの実例

譜例3. Beethoven 交響曲第7番 第1楽章から



印刷されたスコアに直接 Bowing を付けた。

譜例7. 第3楽章から

スコアから

Violin I *Presto*

譜例8

Presto *Bowling*

spiccato で軽快に弾く。

第4楽章から

Vn. I

52

一般的に▽□という逆弓の形で運弓をやっていたが、現在は、□▽を手元の部分で弾いた方がよい表現になる。

譜例9

Vn. I

459

462

461

461 小節目と 462 小節目のスラーは切って前からの音勢を保つ。

「音楽之友社版から」

譜例 10. J. Strauss こうもり一序曲

Allegro vivace

spicc. détaché

弓の中ほどで

譜例 11

Allegretto

譜例 12

譜例 13

譜例 14

譜例 15

印刷のまま

Violino I *a tempo*

Violino II *pp*

Bowing を付けたもの

a tempo

pp spicc.

譜例 16

印刷されたスコアから

Violino I *222*

f

Bowing 歌うことが十分に出来る。

譜例 17

印刷のスコアから

Violino I *piu vivo*

f spicc.

Bowing を付けたもの

「日本楽譜出版社版から」

Ⅵ コントラバスの運弓について

コントラバスの奏者は、弦楽器のというよりは、オーケストラ全体の低音を受け持っているということを知っていなければならない。聴こえないバスでは意味がないのである。今日は、エレキベースという低音を明確に作り出せる楽器が出来たが、これは、長い音を作り出すことは出来ない。歌うといった表情は出せないのである。コントラバス奏者は、チェロと同じフレーズを演奏する時があるが、その場合、音量が足りなければ、弓を短かく使って、例えば、スラーが長ければそのスラーを切って明確な低音を確保すべきだろう。指揮者も、コントラバスがよく鳴るようなボーイングを工夫して付けることが出来るようになるべきである。

Ⅶ 管楽器のタンギング (tonguing) について

管楽器のスピッカート奏法に対して、管楽器奏者も、かなりなすどい短い音を表出出来るように「舌突き」の訓練をしなければならない。弦だけの表現だけでは管弦楽曲は成り立たない。ただ、ホールがひびきすぎると、このスピッカートも、舌突きのすどさも、あまり効果がない。こういったホールは手直しが必要なのである。ひびかないのも困るが、すぎるのもだめなのである。正常な「ひびき」の聴こえるホールが、これから作られることをのぞむのみである。

Ⅷ あとがき

私自身、まだ「運弓の用語」の意味を確定的に分かってはいない。とにかく、基本は、弓の毛を弦の上に置いて弾くのと、弦からはなして打つように弾く、この二つしかない。指揮者がバイオリンを弾けるのなら、各パート、たとえば、管のパートでもよい、皆の前で演奏してリズムの表現についてこのようにと示すのが一番よい指揮法であろう。口でいってもなかなかうまくいかないのである。アマの場合は特にそうなのである。合奏体の運弓も動きは独奏のそれと変わることはない。要するに、音は奏者がちゃんとしたものを作り出すことが先ずあって、あとは印刷された楽譜をしっかりと読みとり、その楽曲が正常に、正当に表現されて行く為にどうするかを考えて行くことになる。スラーの使い方は作曲者の考えそのものと思ってよい。しかし、演奏者は、作曲者の書いたそのものでは、自分も生きないし、又、楽曲も生きられないとして、いろいろと手を入れて行くのである。

よい管弦楽団の演奏は、耳に聴いて心地よく、目で見て弓の動きを楽しめるのである。舌足らずではあるが、今回は、これで一つのまとめとした。

2007年11月18日(日)

於いて 北ノ沢